第46回 下野の書展

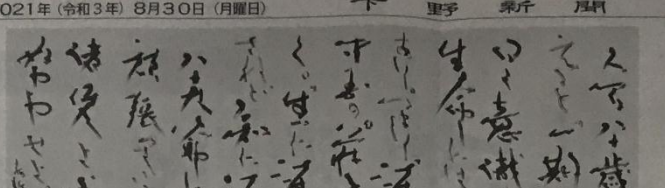
個性豊かな作品 一堂に

9月1～6日、宇都宮・FKDインターパーク店

「第46回下野の書展」（下野新聞社主催、下野書道会共催、県書道連盟など後援）が9月1～6日、宇都宮市のFKDインターパーク店で開かれる。これまでに同展で「下野書展賞」を受賞した作家31人による「下野書壇代表展」、県書道連盟などが推薦する234人による「下野書壇選抜展」のほか、高校生16人による「下野高校生選抜展」（県高校文化連盟書道部会後援）の作品が並ぶ。開幕を前に、大作に挑んだ書壇代表の木曽梅邦さんと斎藤一吼さん、高校生選抜展最高賞「高校下野の書展賞」の斎藤佑香さんに、作品に込めた思いや書の魅力などを聞いた。

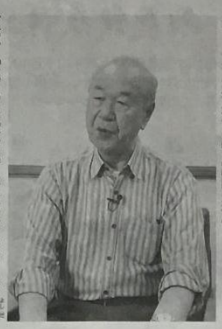
「下野の書展」は午前10時～午後8時（入場は午後7時半まで、最終日は午後4時閉場）。入場無料。新型コロナウイルス感染防止対策を講じ、入場を制限する場合がある。問下野新聞社教育文化事業部028・625・1134。

下野書壇代表に聞く



「のこす言葉」「桃夭」　木曽 梅邦さん（宇都宮）

守りたい「昭和」の心情



きそ・ばいほう　本名・隆。1940年生まれ。葭田真斎、石川木魚両氏に師事。県書道連盟顧問、下野書道会と東日本書道会の特別顧問を務める。

大好きな作家だという半藤さんの言葉に挑む木曽さん

「昭和史研究家だった半藤一利さんの一節は二ユーギニアで戦死した父を、中国最古の詩集『詩経』から選んだ桃夭（とうよう）には21歳で遠方に嫁いだ姉を、それぞれ思い浮かべながら選んだという。

最晩年の半藤さんが残した言葉と、嫁ぐ女性のみずみずしさを桃に例えた詩経の詩。一見関連はなさそうだが、「なぜあの戦争が起きてしまったのかを知る上で不可避な半藤先生の書物、時代や国は違っても変わらない民衆の素朴な願い…。どちらも昭和という時代に生きた私が大切にしたいもの」と心情を明かす。

したためる言葉を自身に取り込むように、朗々と一読後、筆を執った。半藤さんの言葉は、その意志力や信念が伝わるように力強い茶墨の行書体。「桃夭」は初々しさがにじむような青墨で、それぞれの世界観が表現される。

「書の芸術性は、言葉との出合いの経験上にあると説く、鍛錬を積んだ筆の力を信じ、言葉への思いを託す。文字性を超えた抽象的な美の世界は、書が一回性の芸術であるがゆえに、書き手の人生が問われるのかもしれないと憑を正す。

「書くこと」にこだわろうと決めたのは、父の遺品の万年筆を手にした高校生の時、宇都宮高講堂に掲げてあった石川木魚さんの手跡に憧れ、宇都宮大で薗田真斎さんに学んだ。「書に対する志、生気に満ちた自己の書を持ち続けること。2人の師から指導を受けたことは、誇りであり宝」と今も感謝する。

「豊かな線、生命を持つ物語っている。（宇賀神いづみ）

ざなしの強さは、その日がまだずっと先であることを

耐える梅花に願い込め

（縦180㌢、横1045㌢）

「耐雪梅花麗」
斎藤 一吼さん（塩谷）

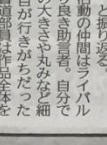
次の字に移るときの間合いや呼吸に注意しながら書くという斎藤さん

一晩かけてすったという一杯の青墨が、気合パケツ一杯の入った息遣いとともに筆先から一気に紙の上を走る。横長の大作は難しい。次の文字に移るとき、筆を上に持って行くのは筆の力に逆らう動きがあり、豪快に墨が飛んだりするらしい。

「間合いや呼吸を意識しの書家故柿沼翠流さんが選んだ理由を明かす。竹の先にドジョウが付いた。机上の作品とは視点が違うし、体全体で書いて表現していくのも楽しい」。制作の場となったのは里山の体育館。雨音の中、床に広げられた草書の作品は縦1・8㍍、横10㍍余に及ぶ。雪に耐えて咲く梅の花を発表したかった」とあえてのこした作品にある言葉

高校下野の書展賞

「臨 中務集」
斎藤 佑香さん（国学院大栃木高3年）



仮名文字の奥深さ知る

書道部顧問の勧めで仮名文字を始めて1年。優美な線にひかれ、平安時代の和歌集「中務集」に挑戦した。

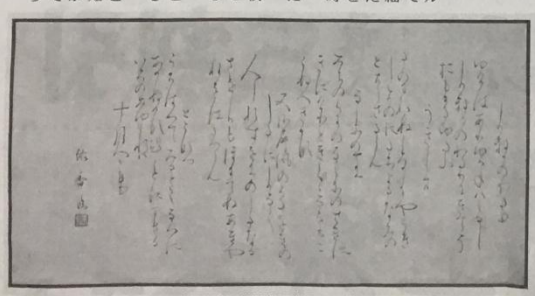
「手本をどのようにとらえるか」を心に留めつつ、コピーではない、自分の個性が表れる書を目指した。

6枚に収めた作品は、繊細で流れるよう。墨の濃淡、字の角度、行の配置、行間など神経を使った。何枚も練習したが、細やかな仮名文字と向かい合う時間は楽しく、「早く書きたい」と部活動の時間が待ち遠しかった。「やる気が続きました」と振り返る。

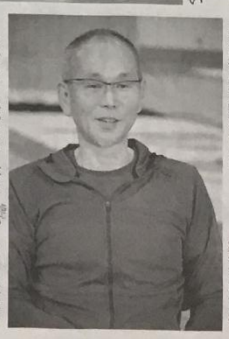
部活動の仲間はライバルであり良き助言者。自分では字の大きさや丸みなど細部に目が行きがちだったが、書道部員は作品全体を見て「手本と違うよ」と時に厳しく指摘してくれた。仲間の励ましが大きな力になった。

清書は1カ月かけ、1枚目の雰囲気を大切にすることを最後まで心掛けながら「一発勝負」で仕上げた。見た人に「きれいな字」と思ってもらえるとうれしい、という。

中務集に挑戦したことで、仮名文字の奥深さを知り、自分の目指す書が分かった。「高校最後の作品で大きな賞を頂けてとてもうれしい」とほほえんだ。（藤田りか）



（縦175㌢、横50㌢の作品の一部）



さいとう・いっこう　本名・正。1959年生まれ。柿沼翠流、卓政少登両氏に師事。毎日書道会会員、独立書人団審査会員、県書道連盟常任理事。

いた時なんかに、『今度の作品は良かった』とか連絡をくれて…」と懐かしむ。

今でも朝晨、筆を握る。「上達していけば書道の風景が変わっていく。古典を広く深く学んで、少しでも自分の作品に生かしたい。終わりのない道だから面白いし、やりがいがある」

湿き始めた作品に目を凝らすと、混ぜた朱墨がほんのり浮かび上がっていた。「その後も不思議とうまくなっている。小学5年の時、柿沼さんの筆遣いに衝撃を受け、書道教室に通うようになった。子供心にも自分の作品に納得できずほどんど見せなかったが、柿沼さんはそんな斎藤さんを黙って見ていてくれたという。

（宇賀神いづみ）